

令和 7 年度春季特別展「王陵 桜井茶臼山古墳」研究講座

2025 年 5 月 11 日(日)13:00~16:30 橿原考古学研究所講堂

青木 敬 国学院大学 「墳丘からみた巨大前方後円墳の出現と桜井茶臼山古墳」

福永伸哉 大阪大学 「桜井茶臼山古墳に見る倭王の系譜」

【感想文 例会だより】

講座例会／研究講座「王陵桜井茶臼山古墳」第 2 回を聴いて

文献に記述が無い「未知の王陵」を明らかにしていく考古学の手法は、文献学を学んだ私にとっては「夢」のような話だが、とくに「あっ…」と思ったのは、青木敬先生が最初に、岡山県の王墓山丘陵にある自然地形の片岡山の写真を見せて、「山全体が、古墳に見えませんか」と話されたことだった。

箸墓古墳の円丘部から台風の折に出土した「特殊器台」は、この片岡山の山頂に築かれた楯築墳丘墓(弥生後期)に起源があるとされるが、青木先生は赤色立体地図を使って、箸墓墳頂の円形壇「円丘」の形状を、片岡山山頂の楯築の円丘部と比較し、被葬者を山の下から仰ぎ見る観念が共通して存在し、仰ぎ見るためのヤマ自体を人工的に古墳として形成して創出したのが箸墓だと話されていた。

それに対して、方形壇が上に乗る桜井茶臼山古墳は地山を削り出して多くが形成された点で、性格が異なり、桜井茶臼山古墳は、形状が類似する古墳がある東日本の勢力を強く意識していたという。

昨年、亡くなられた松木武彦先生の遺著(松木武彦 2024)に、楯築墳丘墓にまで淵源を遡って、古墳が「水が湧くヤマ」だと意識されていた可能性が示唆されているが、文献学者の論文(松尾光 2004)にも、古代氏族「山部」(やまべ)が山陵の警備を職掌としたなら、山陵は素直に「ヤマ」と読まれていたはずだとあることを、思い出さずにはいられなかった。

赤色立体地図から復元された桜井茶臼山古墳の撥状に開いた「真の姿」に感嘆する暇も無く、続いて福永伸也先生の話が始まった。

福永先生は、1~3 世紀に渡る「突線鈕 2 式以降の銅鐸」「画文帯神獸鏡」「三角縁神獸鏡 A 段階」「同 B 段階」の日本列島内での分布を示し、とくに突線鈕式の新相段階が西播磨に集中し、四国東部にもそのラインが伸びることから、最終的に初期ヤマト政権を形成するに至る「共通の母体」が、古くから瀬戸内東部・畿内・東海に存在し、そこに岡山県の吉備は属しないと主張された。

その根拠としてコウヤマキが植生の分布とは無関係に弥生時代から畿内で集中して木棺材に利用されることを挙げ、桜井茶臼山古墳の「倭王」の亡骸を包んだコウヤマキの巨樹が、倭王の身体の出自を物語っていると、渾身の一言を放たれた。

両先生のお話をどのように受け止めたら良いのか？列島を縦断して貯えられた「富」が方形壇の下の被葬者の身体を意識しながら還流したとすると、それも水銀や優品揃いの多量の鏡が貯えられた石室は、万葉歌で王の葬所が「鏡の山」の宮と呼ばれるように、鏡に貯えられた被葬者の魂を遠い未来まで伝えて、解き放つ場所にあたるのだろうか。